

新聞記事を媒体とした社会への関心と リテラシーの啓発

棚田 鈴子・伊藤 洋子

Enlightenment of Interest in the Society and Literacy
Using the Medium of Newspaper Articles

Suzuko TANADA and Yoko ITOH

要旨：教養講座Ⅰを受講している1年生58名(93.5%)を対象に、新聞記事を媒体とした社会への関心とリテラシーの現状を明らかにすることを目的に研究に取り組んだ。学生から提出されたレポート内容を分析した結果①KJ法で分類した結果156データであった。②新聞社は地方紙が約6割で全国紙より多かった。③記事の掲載場所はニュースが最も多く、コラム、社説、投書、その他の順であった。④ジャンルは社会に関するものが最も多く、次いで保健・医療・福祉、地域の順であった。⑤学生の学びの特徴は様々な記事に目を通すことができた、新聞によって情報が理解できた、多種類の新聞を読むなど新聞を活用する意義を感じ取っていた。⑥保健・医療・福祉及び環境問題という身近な出来事に興味・関心を示し、自分の意見を述べ、分析・考察するといった問題解決手法を用いていた。今後は、新聞を媒体とした学習機会をどの様に取り入れるか課題となった。

Key words：リテラシー(literacy)、新聞記事(newspaper articles)、社会(society)、関心(interest)

はじめに

日本新聞教育文化財団は、2002年度新規NIE(Newspaper In Education 以下、NIEと略す)実践校である小学校・中学校・高等学校188校に対し「NIE実践効果測定調査」¹⁾(2002年9月から2003年3月)を行った。その調査結果では、「文章を読むこと」(51.0%)、「ほかの人の意見を聞くこと」(33.1%)、「自分で調べて詳しく知ること」(32.1%)が上位を占め、NIEが文章の読解、他者とのコミュニケーション、調べて学習するなど、「自ら学び考える力」の育成に役立っているとの報告がなされた。また、白鳥は新聞の有効性について「思考の時間を自由にとって系統的・

体系的に検討することができる。(後略)」²⁾と述べている。

しかし、1980年代以後情報化社会の進展により、これまでの知識を体系的に整理し理解する能力を育成することや、コンピューターを活用し、多くの情報を的確に処理・判断する能力や自らの情報を発信する能力の育成が重要視されるようになってきている。

筆者らは、新聞の情報の多様性や優れた記録性および思考する時間が比較的自由の持てる点に注目した。情報収集能力だけではなくリテラシー(読み書き能力)を養うことを目的とし、新聞記事を切り抜き自己の考え(学んだこと、感じたこと)をまとめるレポート作成の導入を試みた結果について報告する。

I. 教養講座の概要

(位置づけ、ねらい等)

1. 看護学科の1・2年生に対し、毎週水曜日に開催されている全学集会の後に30時間の教養講座Ⅰ・Ⅱが設定されている。
2. 教養講座Ⅰのねらいは、物事に対する興味・関心を高め、知的好奇心を培う。
3. 教養講座の担当は学内・学外の特別講師とする。本研究の内容に関わる講座は筆者2名が担当した(表1)。

表1 教養講座Ⅰ(平成17年度)

ねらい：物事に対する興味・関心を高め、知的好奇心を培おう。

回数	テーマ・内容	担当者
第1回	大学での学び方・読書のすすめ	学内講師
第2回	レポートを書く上でのマナー(総論)	学内講師
第3回	クラスA：パソコン教室の使い方 (機器の使用方法および使用する上でのマナー) クラスB：情報の集め方・検索の仕方	学内講師
第4回	クラスB：パソコン教室の使い方 (機器の使用方法および使用する上でのマナー) クラスA：情報の集め方・検索の仕方	学内講師
第5回	患者さんのベッドサイドに立つ前に	学内講師
第6回	新聞の記事を読んで学んだこと・感じたこと ※	学内講師
第7回	発願式に向けての心構えについて	学内講師
第8回	患者さんの生の声を聞こう	学外講師
第9回	パソコンの使い方①	学内講師
第10回	パソコンの使い方②	学内講師
第11回	自己を知ろう(その1)	学内講師
第12回	自己を知ろう(その2)	学内講師
第13回	自己を知ろう(その3)	学内講師

注) ※は本研究者が担当した

II. 研究目的

学生から提出されたレポート内容を分析し、社会への関心とリテラシー(読み書き能力)の現状を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究対象：教養講座を受講している本看護学科1年生62名
2. 研究期間：平成17年9月29日～平成18年3月30日

3. 研究方法

分析Ⅰ

- 1) 提出されたレポート内容をKJ法で分類する。
- 2) KJ法分類にあたっての手続きは、以下のように行う。
 - ① 文章内容は、1つの意味をなす文節で区切り1データとする。
 - ② データの類似性に着目しサブカテゴリーとカテゴリー、コアカテゴリーへと分類する。
 - ③ 分類したカテゴリーにネーミングし、分類されたデータと、サブカテゴリー、カテゴリーを形成している記事数を数える。

分析Ⅱ

- 1) 使用した新聞社の分類を行う。
- 2) 新聞記事の掲載場所及びジャンル別に分類する。

分析Ⅲ

- 1) 提出されたレポートから学生の学びの特徴を分析し考察する。
- 2) リード^{註)}とタイトルの関連性から学生の思考や視点を知る。

4. 倫理的配慮

研究の趣旨を説明し、自由意志で諾否が決められること、公表については個人が特定されないように配慮することを口頭で伝え同意を得た。

IV. 結 果

1. レポート回収率

62名中レポートの提出者は58名で回収率は93.5%であった。

2. 使用した新聞社の分類 (複数回答)

新聞記事は、信濃毎日新聞(23)、朝日新聞(12)、中日新聞(11)、読売新聞(9)、毎日新聞(7)、長野新聞・静岡新聞・南信州(1)であった。地方紙(37)、全国紙が(28)で地方紙の記事を読む学生の方が多かった。

3. 新聞記事の掲載場所及びジャンル別 (複数回答)

新聞記事の掲載場所は、ニュース53名が最も多く、次いでコラム35名、社説・投書・その他は各3名であった(図1)。

新聞記事のデータを各ジャンルに分類すると、多いジャンルとして、社会に関するもの22データ(37.9%)、次いで、保健・医療・福

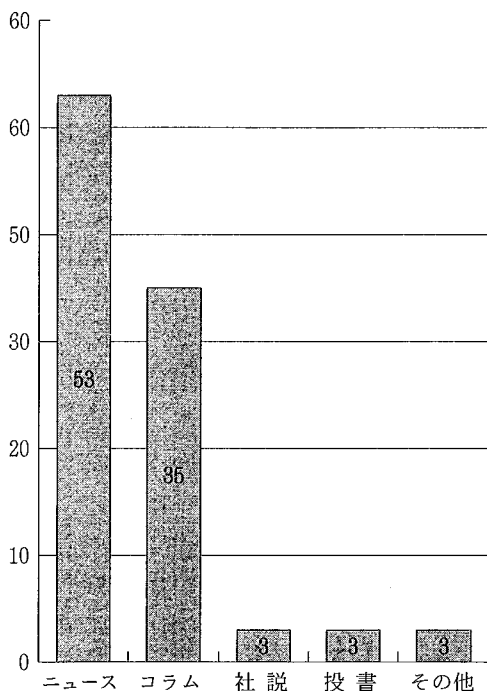


図1 新聞記事の掲載場所

祉に関するもの17データ(29.3%)、地域に関するもの9データ(15.5%)であった。少ないジャンルは、経済に関するもの4データ(6.9%)、暮らし・家庭に関するもの3データ(5.2%)、教育・学校に関するもの2データ(3.4%)、スポーツに関するもの1データ(1.7%)であった(図2)。

4. 156データのカテゴリー化

レポートに収集された新聞記事を1つの意味をなす文節で区切り1データとした。その結果、156データでその内訳は、2つのコアカテゴリー、8のカテゴリー、29のサブカテゴリーに分類された(表2-1, 2-2)。

1) 2つのコアカテゴリー

保健・医療・福祉に関する今日的課題が100データ(64.1%)、環境問題に対する取り組み56データ(35.9%)であった。学生の関心は保健・医療・福祉の領域が6割以上を占めた。

2) 8つのカテゴリー

保健医療福祉の今日的課題は、高齢者の現状と課題35データ(22.4%)、介護保険制度

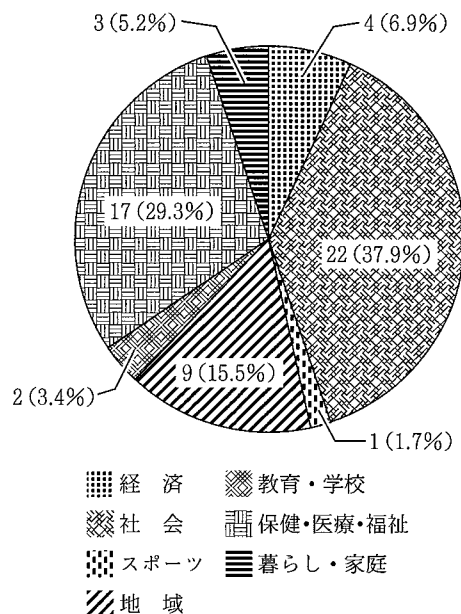


図2 新聞記事のジャンル別

表 2-1 保健・医療・福祉に関する今日的課題

デ ー タ	サブカテゴリー	カ テ ゴ リ ー
ニ ー ト (1) 若者の関心 (1) 老いのイメージ (1)	意識のもち方 (3)	高齢者の現状と課題 (35) 22.4%
子育ての環境 (2) 祖父母の育児参加 (1)	子 育 て (3)	
高齢者世帯の家計 (1) 高齢者就業率 (1) 高齢者の就業意欲 (1) 年 金 (1)	高齢者世帯の家計 (4)	
終生現役 (1) 交 流 (1) 趣 味 (1) 生き甲斐 (1) 退職後の男性 (1) 第 2 の人生 (1) 社会人大学院 (1)	終生現役 (7)	
介護予防 (2)	介護予防 (2)	
健 康 (1)	健 康 (1)	
食事の楽しみ (1)	食事の楽しみ (1)	
高齢者の健康づくり (1) 長野モデル (1) コンビニエンスストア (1) ご用聞き (1) 地域での取り組み (1)	地域での取り組み (5)	
自立した生活 (1) 一人暮らし (1) 自立支援 (1) 残存能力 (1) 生活用品の改良 (1) 昔ながらの生活 (1) グループリビング (1) 動 物 (1)	自立支援 (8)	
ユニットケア (1)	個別ケア (1)	
介護保険制度 (9) 利用者負担 (5) サービスの質の低下 (3) 給付削減 (1) 経費削減 (1)	介護保険制度の見直し (19)	介護保険制度の導入と見直し (23) 14.7%
救済の仕組み (1)	社会保障制度 (1)	
経済問題 (1) 老人医療費 (1) 長期入院費 (1)	医療費高騰 (3)	
人口動態 (1)	人口動態 (1)	少子高齢化 (17) 10.9%
少子高齢化 (5) 高齢社会 (1) 高 齢 者 (6)	少子高齢化 (12)	
社会問題 (3) クーリングオフ (1)	社会問題 (4)	

認知症 (3) 名称変更 (1) 病気の理解 (1) 徘徊 (1) 受容 (2) ふれあい (2) コミュニケーション (1) 看取り (1) 癒し (1) 傾聴 (1) 人権尊重 (1)	痴呆症から認知症への名称変更 (1)	認知症の理解 (15) 9.6%
	認知症の症状 (5)	
	認知症の接し方 (9)	
在宅介護 (1) 介護問題 (1) 家族 (1) 介護負担 (2) ストレス (2) 社会資源 (1)	家族介護 (8)	家族介護 (8) 5.1%
ボランティア (2)	社会資源 (2)	社会資源の活用 (2) 1.3%

の導入と見直し23データ (14.7%), 少子高齢化17データ (10.9%), 認知症の理解15データ (9.6%), 家族介護 8 データ (5.1%) 社会資源の活用 2 データ (1.3%) であった。環境問題に対する取り組みは、環境問題36データ (23.2%), 環境教育20データ (12.8%) であった。

3) 29のサブカテゴリー

「高齢者の現状と課題」は、自立支援 8 データ、終生現役 7 データ、地域での取り組み 5 データ、高齢者世帯の家計 4 データ、意識の持ち方・子育てが各 3 データ、介護予防 2 データ、健康・食事の楽しみ・個別ケアが各 1 データの10であった。

「介護保険の導入と見直し」は、介護保険制度の見直し19データ、医療費高騰 3 データ、社会保障制度 1 データの 3 つであった。

「少子高齢化のサブカテゴリー」は、少子高齢化12データ、社会問題 4 データ、人口動態 1 データの 3 つであった。

「認知症の理解」は認知症の接し方 9 データ、認知症の症状 5 データ、痴呆症から認知症への名称変更 1 データであった。

「家族介護」は 8 データ、「社会資源の活用」は社会資源 2 データであった。

「環境問題」は地球温暖化12データ、環境

破壊 8 データ、環境問題 7 データ、公害 6 データ、自然災害 3 データの 5 つであった。

「環境教育」は、生活の見直し10データ、愛知万博 4 データ、環境保護 3 データ、環境教育 2 データ地球温暖化対策 1 データの 5 つであった。

5. 学生の学びの特徴

1) リードとタイトルの関連

学生達が選択したリードで多かったものは、福祉の類型のリードでは「65歳以上 5 人に 1 人」4 名、「自己負担変わる介護保険下」3 名、「介護保険 1 日からの自己負担」3 名であった。これに対し学生は受けとめ方が様々でありタイトルは一樣ではなかった。環境の類型のリードでは「温暖化」「自然」「省エネ」など主要概念が表記されるものが多かった。学生のタイトル表記はリードに呼応する傾向があった (表 3)。

2) レポートの内容

レポートの内容について、例えば A は、長野モデルを提示して、高齢者が毎日楽しく過ごすことや、仕事を通しての生き甲斐の重要性に気づいていた。なかでも高齢者就業率は全国平均22.2%に対し、長野県は31.7%と全国でも高い比率を示していることについて高

表 2-2 環境に対する取り組み

デ タ	サブカテゴリー	カ テ ゴ リ ー
地球温暖化 (10) 異常気象 (1) CO ₂ 排出 (1)	地球温暖化 (12)	環境問題 (36) 23.2%
環境問題 (3) 環境汚染 (1) 乱獲・破壊・消滅 (1) 絶滅危惧種 (1) スポーツ (1) ドーピング (1)	環境破壊 (8)	
ハリケーン (2) 自然の脅威 (1)	自然災害 (3)	
水 俣 病 (2) 公 害 (1) 差 別 (1) アスベスト (1) 除去作業 (1)	公 害 (6)	
グリーンバンド (1) ホワイトバンド (1) イエローバンド (1) 環境教育 (1) ゴミ問題 (1) 水 資 源 (1) 清 水 (1)	環境問題 (7)	
排出量取引制度 (1)	地球温暖化対策 (1)	環境教育 (20) 12.8%
愛知万博 (3) イベント (1)	愛知万博 (4)	
岡谷エコフェスティバル (1) 諏訪地区の試み (1) ホテル (1)	環境保護 (3)	
省 エ ネ (2) 生活の見直し (2) 温暖化対策 (1) リサイクル (1) 「自分」から (1) 自分の問題 (1) レ ジ 袋 (1) マイバッグ (1)	生活の見直し (10)	
資源活用 (1) 生育環境 (1)	環境教育 (2)	

齢者が亡くなる寸前まで元気に働いていたいという終生現役の考え方があることを学んだ。

Bは、グループリビングと言われる共生型住宅の一形態を紹介し、人と人が交流し、趣味、クラブ活動などを通して生活の場が広がること、自立した生活に繋がると感じていた。

Cは、行政と民間が協力し合う高齢者が暮らしやすい社会の構築について、コンビニエ

ンスストアによる「ご用聞き」の記事を例示している。コンビニエンスストアは年中無休・24時間営業という利便性や、団塊の世代の利用者も増加している特異性を活かし、この事業を推進すべきであるとの考えを述べていた。

Dは、5つの事項にまとめていた。その内容は、介護保険法改正によって利用者が減少する、利用者負担が増える、お金がないと介

表3 リードとタイトルの関連性

リ　　ー　　ド	タ　イ　ト　ル
自己負担変わる介護保険 下	自己負担一変わる介護保険
自己負担変わる介護保険 下	何のための介護保険制度なのか
自己負担変わる介護保険 下	介護保険（給付削減と施設の減収について）
介護保険1日からの自己負担	どうなる!?これからの医療保険・介護保険（介護保険 自己負担 始まる、医療、介護保険を併用）
介護保険1日からの自己負担	高齢化
介護保険1日からの自己負担	介護保険法改正に不安
「ご用聞き」で地域密着	高齢社会を迎えて思うこと
「ご用聞き」で地域密着	高齢化について
改めて理解を	高齢者を取り巻く環境
改めて理解を	認知症について
改めて理解を	認知症について
水俣病裁判闘争再び	水俣病
水俣病裁判闘争再び	水俣病
介護 子育てのように	これからの介護とは
介護 子育てのように	介護, 子育てのように
高齢化社会と社会人大学院	社会人大学院
高齢化社会と社会人大学院	高齢者が送る第2の人生
地域に根付く介護予防	高齢化社会について
第2の人生どう暮らす?	老後をどう暮らすか
私の介護日誌	高齢者の関する記事を読んで
お達者老後へ 集え退職男性	高齢者と介護予防
65歳以上5人に1人	高齢化社会の中で
65歳以上5人に1人	少子高齢化における問題点と対策について
65歳以上5人に1人	高齢者に対する介護とは
65歳以上5人に1人	高齢者の再就職について
少子高齢化, 急速に	少子高齢化によって起こる問題
「高齢者」の定義を改めよう	高齢化の今とこれから
「高齢者」の定義を改めよう	高齢化社会に向かう日本の未来
老人医療費 県, 抑制へ推進計画	老人医療費問題について
打ち切られる調理費給付	高齢者について
お年寄り用品Q&A	高齢者（高齢者がより良く生活するために、クーリングオフ）
少子化対策の要望過去最高	現代の少子高齢化を見つめて（本当に高齢化社会, 対策をしても なかなか良い方向には…）
超高齢社会への備えを	敬老の日に考える
「医」再考 長野モデル	健康な長寿でいるために
読者からの手紙	安心して介護を続けるために
子育て支援最「後進国」	進む少子化～女性就業進まず～
祖父母の育児参加	祖父母の育児参加
福祉施設清掃ボランティア	福祉施設清掃ボランティア

マイバッグ「持参」15%	『身近な環境対策』～マイバッグの良さ（1. 動機, 2. なぜマイバッグは必要なの??, 3. そこでマイバッグの登場!!, 4. 全体のまとめ, 5. 参考文献）
100年で7度上昇の予測も	生活を脅かす地球温暖化
絶滅危惧植物	変わりゆく生態
環境・省エネが課題	環境・省エネが課題
進まぬ石綿除去	進まぬ石綿除去
地球の未来に指針	ゴミ問題とリサイクルに関して
自然の不思議に迫る	温暖化対策の第1歩
「強暴化」海面水温上昇で	地球温暖化について考えること
「UNDESD」環境教育プロジェクト	水問題, 環境問題と子ども達
北極海の氷今世紀中に消失?	環境について思うこと
冠水—悪夢再び	自然災害
乱舞支える人の手入れ	守ろうホテル
温暖化防止へ省エネを	地域に合わせて地球を守ろう
秋の山 異変?	森林・気象について
地球人の輪 広がってこう	人間と環境について
アラスカ温暖化不安募る先住民	地球温暖化
環境への関心高めた	地球を愛するとは ～愛・地球博は真の意味で環境問題を訴えたのか～
広がる七色バンド	広がる七色バンド
ドーピング	ドーピング・刹那主義の脅威
温暖化防止へ強力な手段を	温暖化防止

注1 タイトルは学生のレポートのテーマを掲載

注2 タイトルの「」を省略

注3 ()は小見出し

護が受けられない、寝たきりや認知症の人を増やしたり、悪化させる、経費削減、人件費削減などによるサービスの質の低下であった。これらの事項についてDは雇用年齢の引き上げ、介護保険料支払い年齢の引き下げを提案していた。

Eは、Z地区の介護保健施設を対象としたアンケート結果から利用者の4割以上が負担増によって利用料を払えないという事実を知った。平成17年度10月に改正された介護保険制度の不安と混乱を次のように紹介している。例えば変更額に伴う利用者と事業者の再契約の遅延や手続きが十分に行われていないと言う現実問題を捉えていた。

Fは、介護保険制度の改正で、居住費や食

費が、原則として利用者の自己負担となり、利用者や施設の運営には早くも様々な影響があり、新制度の矛盾を指摘していた。

Gは、高齢者数の現状や人口減少から、労働力人口が減り経済活動が縮小すること、介護保険など社会保障の財源を支える現役労働者の負担増に繋がること、高齢者を介護する人が減るといった少子高齢社会が進むにつれ、年金問題、保険料など生活にどのような影響があるかについて意見を述べていた。これらの問題となる背景について、男女雇用機会均等法で社会進出の女性が増えたこと、出産後の再就職問題に関すること、経済的理由により、子どもの人数に制限が出るなどを分析した上で、考察を加えていた。

Hは、グラフから高齢化の増加により、介護問題、介護施設の不足、保険・年金問題を理解していた。さらに少子化の問題は、高齢社会と相まって若者達の負担が増えることについて触れていた。

Iは、「痴呆症」から「認知症」に名称改正された趣旨を説明した上で、認知症の症状別の関わり方を学んだ。

Jは、亡き母の介護を振り返るコラムから、介護の秘訣について、子育てと同じように愛情込めて一生懸命関わることの大切さを感じ取っていた。

Kは、アメリカを直撃したハリケーン「カトリナ」「リタ」の自然災害を取り上げ、地球温暖化の影響について述べている。そして地球温暖化対策として、ゴミの分別や自家用車から出る排気ガスを抑制する努力など身近な生活の見直し対策の必要性を痛感した。

Lは、温暖化対策の第1歩として、動植物の生態系の変化への対策を述べていた。民間対策として、最近知られているグリーンバンド「increase forest」(森を増やそう)による効果として、一人ひとりの気持ちが大きな力となり、環境問題への解決の一助となると考えている。

Mは、環境教育プロジェクトの「ずっと地球と生きる」の授業の取り組みを紹介していた。授業内容は、きれいな水を確保するためにトイレや手洗いをするときの水の量、米のとぎ汁・風呂の残り湯の再利用という4つの対策を挙げていた。さらに、子ども達に自分のできる範囲の知識や情報を伝えていくことの必要性を感じていた。

Nは「身近な環境対策－マイバッグの良さ－」と題し、環境基本計画策定市民委員会の調査結果を考察していた。レジ袋の作成、再生、破棄の際の二酸化炭素(温室効果ガス)が地球温暖化を促す。地球温暖化による被害は海面水位の上昇、洪水、氷河の消失、干ばつ、異常高温、台風・竜巻といった連鎖について

調べていた。そしてマイバッグとレジ袋の問題点と良い点を指摘し、地球温暖化をくい止めるには、自然に対する一人ひとりの意識を高める必要があると述べていた。

3) 学生の反応

レポート提出後の自由記述による学生の意見は、「新聞を読む機会ができた」「様々な記事に目を通すことができた」「多種類の新聞を読むことができた」「考えることができた」「考えをまとめることができた」「文章を書く機会が持てた」「社会の様々な出来事を知り、関心が持てた」「新聞によって情報が理解できた」「楽しめた」「面白いと感じた」「興味を

表4 学生の反応(複数回答)

新聞を読む機会ができた(12)
様々な記事に目を通すことができた(3)
多種類の新聞を読むことができた(1)
考えることができた(5)
考えをまとめることができた(3)
文章を書く機会が持てた(3)
書き方がわからなかった(2)
小論文の書き方を教えてほしい(1)
参考文献の書き方を教えてほしい(1)
社会の様々な出来事を知ったり、関心が持てた(12)
新聞によって情報が理解できた(2)
楽しめた(3)
面白いと感じた(2)
興味を持てた(2)
関心が高まった(2)
新聞を読むことが好きになった(1)
何かを感じた(1)
習慣になりそう(1)
記事をファイルしていきたい(1)
活字を読むことになれてきた(1)
短大の授業で学んだ知識を活かすことができた(1)
医療に関する記事が多い(1)
時期を考えてほしい(1)
時間が少ない(4)
時間内で終わる内容にしてほしい(1)

持てた」「関心が高まった」「何かを感じた」「習慣になりそう」「記事をファイルしていきたい」「活字を読むことに慣れてきた」「短大の授業で学んだ知識を活かすことができた」「新聞を読むことが好きになった」「医療に関する記事が多い」であった。要望は「書き方がわからなかった」「小論文の書き方を教えて欲しい」「参考文献の書き方を教えて欲しい」「時期を考えて欲しい」「時間が少ない」「時間内で終わる内容にしてほしい」「添削をして貰える機会を増やして欲しい」と言う意見が寄せられた(表4)。

V. 考 察

看護学科の教養講座Ⅰを受講している学生を対象に新聞記事を媒体とした社会への関心とリテラシーの啓発を目的に取り組んだ結果について、学生の新聞活用の実態と学生の学びの特徴の2点について考察を述べる。

1. 新聞活用の実態

ニュースやコラム・投書からの切り抜き記事が多かった。その理由は、次のようなことが考えられる。ニュースでは、過去の記事から調べることができることや、解説などから考えることができることなどである。大きなニュースが起きると新聞社はその背景や関連事項について特集を組むため、新聞から一つのニュースを追って考えていくことが可能である。したがって、学生は単にニュースを知るだけではなく、その背景を知り、考えることができるのではないだろうか。

投稿型コラムは、さまざまな分野の情報及び幅広い世代の考えが掲載され、読み易い表現で書かれていることなどから、学生は選択したのではないかと考えられる。

新聞は事件や事故を報道するだけではなく、政治、経済、社会、文化、科学、暮らし、環境、その他、さまざまな分野にわたって情報に目を向けている。新聞に載った情報を学生

自ら選択・分類し、新聞の記事内容を読み取っていた。

2. 学生の学びの特徴

リードと学生がつけたタイトルとの関連性をみると、リードとタイトルだけで学生の思考や、新聞記事から何を読み取ったかが見えてくるものがある。つまりそのような学生は、新聞記事の内容について視点をきちんととらえることができていると考えられる。さらに、小見出しによって自分の考えをまとめたり、相手にわかりやすいように表記していた学生もいた。一方、タイトルや小見出しが短かったり、的を得ていないためわかりづらいものもあった。

見出しからわかる内容に、興味を引かれるからこそ、それに続く文章が読まれる。文字数は一概には言えないが、タイトルや小見出し10文字くらいが一番わかりやすい。例えば「少子高齢化、急速に!」、「どうなる環境問題」のように、内容を一言でズバリと表すタイトルや小見出しがついていれば、それだけで読み手を引き込むことができるのではないだろうか。

学生は急速な少子高齢化が進む中で、社会保障制度の抜本的な見直しを通して高齢者のヘルスケア“医療費や介護費用、並びに医療・介護施設に於ける質と量の適正配分、介護保険給付の重点化”などの課題に焦点を当て、自分の意見を述べたり分析をして考察を加えていた。

また、環境問題については生態系の変化をマクロとミクロの視点から捉え、個人の生活の見直しの重要性を再認識していた。

このように、新聞を通して、“なぜ、どうして”という知的な問題や“どうしたらよいのか、どの解決策がより望ましいのか、もっといい方法はないか”という実践的な問題を発見する。問題を発見すると、問題を解決するために必要な思考・判断を行う。このような

過程を繰り返す中で、学生は自ら学習し、「問題発見力」「探求力(思考力)」「意志決定力(判断力)」の3つの要素を身につけていくことも可能ではないかと考える。また、その過程において、「情報活用能力」を獲得していくと考えることもできる。

教科書は、時々刻々の社会の変化をとらえることができない。それに対して新聞は、刻々と変わる社会を取り扱っており、内容は現在進行形のものが多い。そのため、現代の最新の問題を教材とすることができ、更に、その問題は学生にとっては身近な問題であり、学生の興味、関心を引き出しやすい。学生一人ひとり違った視点で新聞を眺め、独自の観点から思考し、角度の違う主張をすることができる。その意味で、学生に考えさせると言う点では格好の教材だといえる。

教養講座終了後の学生の反応は、「新聞を読む機会ができた」や「様々な記事に目を通すことができた」であった。白鳥によれば、「テレビ等の映像メディアが文字文化を侵食しつつある」³⁾と述べている。また、NHKが行った10代の若者の閲覧率は10%であり、手軽なテレビメディアに流されやすいと考える。現代は、情報化の進展によりテレビやインターネット等、自分の興味・関心を示す断片的に流れる情報が容易に収集できる。しかし、新聞を閲覧することは、多くの情報から情報を取捨選択し、「社会の様々な出来事を知ったり、社会への関心を高める」や「新聞によって情報が理解できた」等、新聞メディアの特徴が効果的に働いたと考える。

「考えることができた」や「考えをまとめることができた」等、高精度な新聞記事を収集した後に自己の考えをまとめることにより学生はリテラシーが高まると考えられる。さらに、「添削してもらえらる機会を増やして欲しい」との学生の要望は、他者との意見交換の媒体となるとともに、学生と教員のコミュニケーションの手段としても有用であると考え

える。

新聞を活用する意義は、今日的な課題をつかみやすく、読む力・資料活用能力を養うことにある。

新聞が教材として優れている点とは、①最新のデータ・情報が得られる。②現に社会的な出来事になっていることを題材にできる。③幅広い多種多様な情報が詰まっており、いろいろな使い方ができる。④人々の生の声、異なった意見、多様な考え方を知ることができる。⑤時間的な経過をたどって調べることができる。⑥だれでもが容易に手に入れることができる。⑦いくつかの新聞を比べて検討できるなどが考えられる。

このように、新聞が教材として多くの可能性を秘めたものであることは言うまでもない。授業のなかで深められなかったことを更に追求することが新聞では可能である。記事の読みとり、論理の組立、記事の比較などこれこそが筆者の目指す“生きた学力”といえる。

時々刻々と変化する社会情勢について新聞を通して新しい情報を得たり、各紙を比較検討することによって自分の考えを持つことができる。また、論理を再構築することもできると考える。さらに、さまざまなメディアのなかであって、とりわけ新聞は、一人ひとりのペースで読み、考え、そして理解することができる特性を持っている。したがって、新聞を活用した学習は、広い視野に立った思考力を身につけることも可能となる。

今後の課題

新聞メディアを活用し、新聞記事のレポートを作成することは社会への関心やリテラシーを高めることに有用であると考えられる。今後は過密なカリキュラムの中で学生の要望を取り入れながら、継続していくことが課題である。

註

リードとは広辞苑によると、「新聞の記事・

論説などの概要を書いた前文、前書。」と記載されている。

引用文献・参考文献

- 1) 日本新聞教育文化財団N I E委員会編集：
N I E実践効果測定調査結果報告，財団
法人日本新聞教育文化財団，p.13, 2003.
- 2) 白鳥元雄他：メディアと教育，p.109.
放送大学出版会，2000.
- 3) 前掲書，メディアと教育，p.107.
- 4) 樺山たみ子：看護教育に新聞を，N I E
実践報告書，財団法人日本新聞教育文化
財団，2006.